# 研究室紹介

UDC 061.62: 69/72

## 村松研究室

生産技術史という文科的な部門を担当する当研究室は所内の他の研究室のように実験室というものを持たない代りに，研究費の大半を文献，図書の購入に当てるなど，当所においては異色の存在である．工学の研究に即した事務・管理機構を持つ中にあっては，時に不便をかこつこともあるが，反面，異色であるがゆえに何かと守り育てていこうという全所員の好意のもとに研究を進めている．

もともと生産技術史部門は，昭和24年5月設置の生産技術研究所の将来計画9部門のうち，第7部6部門の一つに予定されていたものであるが，暫定的に第5部に属して現在に至ったのである．その起源を第二工学部建築学科の建築史講座に持つので，建築技術史の研究のウェイトが現在でも大きいが，時代に対応して科学技術史および文化財の保存，とくに生活環境の歴史的研究およびその保存に関する研究のウェイトも増大している．境界領域の科学技術の編成の必要が叫ばれ，文科・理科の別を越えた学問の協力が望まれるようになってきた今日，生産技術研究所における当研究室の存在は，たんに“異色”で終ってはならないものがあると，室員一同大いに頑張っている．現在の人員は助教授1，助手1，技官・事務官各1，大学院生3，研究嘱託1である．

現在までの業績は，昭和44年3月停年退官された関野克教授（現名誉教授，国立東京文化財研究所長）の指導に負うところが大きいが，とくに生産技術史の研究，日本近代建築史の研究，ヒストリック・クオーターの研究は，同教授の先鞭をつけられたものを，村松以下がさらに発展させているものである．さらに建築生産組織の研究，建材資源問題の調査研究が，生産技術史の観点と方法論によって新たに加えられている．以下その概要を説明しよう．

### 1.　生産技術史の研究

人間にとって技術とは何かがきびしく問われている今日，このテーマは一層切実な問題となっている．昭和42年東大公開講座において村松が講義した「人間と機械の歴史」は，上記の問いに多少とも答えたものであるが，さらに資料の蒐集と解析を進めている．また現在国が佐倉市に建設を予定している国立歴史民俗博物館（仮称）の，展示計画委員会委員として村松が明治以降の科学技術の部を担当し，室員の協力のもとにその資料の選定・評価を行なっている．さいきん木工具の研究も始めた．

### 2.　日本近代建築史の研究

主として明治以降の日本近代建築の研究を行なっている．とくに明治建築の遺構の調査と，その全国的な分布に関する研究においては，当研究室がその全国的な中心機関として自他ともに許すところがある．また建築およびデザインの東西相互交流に関するユネスコの調査にも日本を代表して参加し，国際的な研究交流に協力している．

### 3.　ヒストリック・クオーターの研究

ヒストリック・クオーター（歴史的文化地域）の開発的保存手法の研究は，従来文化財を個々の点として保存してきたわが国の欠陥を埋めるものである．昭和45年9月京都で開催されたユネスコ主催の「京都・奈良伝統文化保存国際シンポジウム」は，日本でも伝統的文化地域の面としての開発・保存の手法を早急に確立すべきであることを強く要請した．関野名誉教授はそのシンポジウムの日本代表として，村松はそのプロモーターとして参加した．現在そのケース・スタディとして埼玉県川越市の土蔵造り民家群のある地域を対象として研究を進めている．（昭和46年度選定研究）

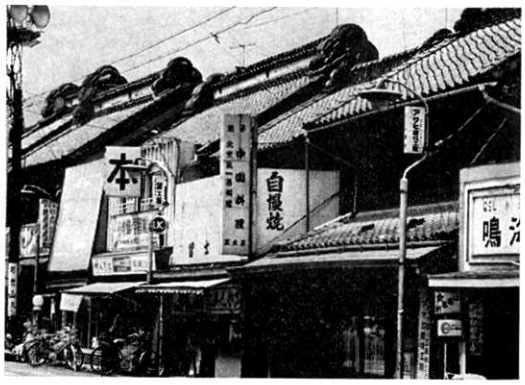
### 4.　建築生産組織の研究

本多昭一助手は建築生産近代化の中心となるプレハブ技術の理論的・歴史的研究を進めており，村松は建築の設計および生産組織の技術論的な考察を行なっている．建築施工の現状を各種の工事現場，建材メーカーの実地に即した調査も，さいきんとくに，さかんに行なっている．

### 5.　建材資源の研究

村松と結城茂雄研究嘱託は，総理府資源調査会建材小委員会委員として，将来の建材資源のあり方，その置換の歴史的な法則性の採求をテーマとして調査研究を進めている．

（村松貞次郎）




川越市の土蔵造りの町並み（狩野大学院生撮影）